
遊戯王～友愛～

機甲竜騎兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王〜友愛〜

【Nコード】

N1570P

【作者名】

機甲竜騎兵

【あらすじ】

ヒータとアウスがさらわれた！

ついに侵略を開始したインヴェルズ。その最初の標的となったのは霊使い達の住む魔法都市エンディミオン。

だが、その裏ではインヴェルズの恐るべき計画が進行していて…

…！

エリア、ウィン、ダルク、ライナの四人はヒータとアウスを救うため、畏と知りつつ廃棄された機械改造工場へ向かう。

しかし、エリアとウィンの関係はまだギクシャクしていて……。

前作EURDのその後に起きる、熱きデュエルが始まる！

侵攻（前書き）

前作EURDの続きのようなものです。

別に章として分けるほど繋がっているわけではありませんが、少しでもEURDに伏線があります。

読んでた方がもう少し楽しめるはず。

あと、デュエル小説なのでまた文法をあえて無視していますのであしからず。

侵攻

チーム対抗属性統一ライディング・デュエル——EURDから1ヶ月がたったある日のこと。

霊使いの6人は王立魔法図書館で恒例の勉強会をしようと、いつもの服を着て魔法都市エンディミオンの広場に集まっていた。

だがその中に、ヒータとアウスだけがいなかった。

「2人ともどうしたんだろ。ヒータは……いつも面倒くさがるけど、アウスが来ないなんて珍しいね」

ダルクは2人がいないか広場を見回したが、いるのは散歩をしている黒衣の大賢者や、魔法の練習をしているソリテア・マジカルなどで、2人の姿は見えない。

「って、ライナも寝てないで探してよ」

「だってお日様が気持ちよくて……」

木漏れ日が差すベンチに座って、ライナは半分寝言のように言った。

EURDの時の凜々しい姿はどこにいったのかとダルクはため息をつく。そして横目でチラリとエリアとウインを見た。

エリアがEURDの時に本心を話して以来、2人の関係はグクシヤクしている。もっともウイン以外はエリアがウインに敵対心のよくな感情を抱いていることを薄々感じてはいたのだが。

ウインはエリアになにか話しかけようとするが、エリアはずっと視線を逸らしているため話しかけ辛そうである。

その時だった。突如街中に警報が鳴り響き、その音に驚いた鳥達が空へと逃げる。

「なに？」

その音にさすがのライナも目を覚まし、エリアとウィンも周りを見回す。広場にいる他の人達も少し不安そうな顔で歩みを止め、キョロキョロと顔を左右に動かしている。

「見る！」

誰かが空を指差して言った。広場にいる人達が一斉に空を見上げると、そこには黒い雲のようなものが空を覆う勢いで街に迫っていた。

「インヴェルズだ！」

黒い雲のように見えたものは、その全てが侵略者にして捕食者であるインヴェルズの集団で、今まさに街を襲おうと雨のように降り立ってくる。

「逃げる！」

広場にいる人達は、いや街にいる全員が悲鳴と共に逃げ惑う。たしかにインヴェルズは少数ならば街への出入りも許されているが、これほど大規模なものはやはり侵略以外なものでもなかった。

「皆さん王立魔法図書館へ！ あそこなら魔力で強力な結界が張れます！ 地下大所蔵のスペースも充分ですから急いで！」

先程まで半分寝ていたとは思えない雰囲気でライナは言った。

「私達も急ぎましょう！」

「でもヒータとアウスが……」

ウィンに言われ、ライナはハツとする。

「2人ともいったいどこに……！」

周りを見回すが、逃げる人と襲いくるインヴェルズで視界はもはや埋まっている。

「とにかく私達も逃げましょう！」

「待て。小娘ども」

王立魔法図書館に避難しようとする4人の前に、空からハサミのような腕と巨大で長い触角を持ったインヴェルズが立ちはだかった。「誰だ！」

ダルクが杖を構えて3人の前に出る。その後ろで3人も杖を構えた。

「私の名はホーン。インヴェルズの王であるグレスの右腕であり、大幹部の1人だ」

ホーンはそう言うのとヒツヒツヒツと笑う。

「僕達になんの用だ！そこをどけ！」

そう言ったダルクの後ろで、ホーンの死角になるようにライナが光の魔法弾を作る。

「ヒツヒツヒツ、お前達の仲間で見つからない者が2人ほどいるだろう？」

「なに？」

ホーンの言葉に4人は驚く。見つからない2人の仲間——ヒータとアウスの顔がよぎる。

「ヒツヒツヒツ、そう……炎と小娘と地の小娘だな」

4人の考えを見透かしたようにホーンは言った。

「お前！ヒータとアウスをどうした！」

「安心しろ。今はまだ無事なはずだ。助けたければ、お前達だけでこの街を出て南にある、廃棄された機械改造工場にくるのだな。別れの挨拶もしたいだろうからな」

そう言うのとホーンは笑いながら飛び去っていった。

「待て！クソツ……！ヒータとアウスが……！」

「ど、どうしよう。ブラック・マジシャン先生やエンディミオンさんに……」

「いえ、あいつは私達だけで来いと言った。それに街が襲われてい

る今、ブラック・マジシャン先生達もインヴェルズを撃退するために戦っているはず。とても手は回せないと思う」

オロオロとするウインにライナは言った。

「つまり、ホーンが言ったとおり私達だけで向かわないといけないと言っことね」

エリアが言うと、ライナは辛そうな顔で小さくうなづく。

「なら急ぎましょう。ホーンは『今はまだ』と言っていた。2人が危険になる可能性が高いと言っことでしょ」

エリアの言葉にライナは一瞬躊躇するが、ヒータとアウスのことを思い、決意する。

「……ええ。いきましよう」

ライナがうなずきながらそう言うと、4人は逃げる人々とは逆方向へと走っていった。

魔法都市エンディミオンを囲む広大な森。その少し南に、かつて使われていた機械改造工場はある。

今では足を運ぶ者もないこの場所は立入禁止区域とされ、工場自体もすでにかなりの老朽化が進み、建物全体に蔓やらコケやらが生えている。

4人はその場所に走って辿り着いた。途中森の上を街を襲いにいくインヴェルズが何度も通ったが、4人には気づかなかったのか、あるいはあえて無視したのか、一直線に街へと飛んでいった。

振り向くと空からヴァイロンの一団も援軍として駆けつけ、インヴェルズと戦っている。しかし予想外に大規模な侵攻だったためか、遠目から見ると押され気味である。

「みんな……大丈夫かな……」

心配した顔で、街を見ながらウインは言った。

「ブラック・マジシャン先生達は強い。ヴァイロンも援軍に来てる

し、大丈夫だよ」

ダルクは自分にも言い聞かせるようにウインを励ます。

エリアとライナも街の様子が心配そうだが、今はヒータとアウスを助けることに集中しようと決める。

「エリア、そっちを引っ張って。電力はもう来てないはずだから手で開くと思うけど」

ライナに言われてエリアは電動式の扉の隙間に指を入れ、ライナと共に左右に引っ張る。すると扉は少しずつ動き、なんとか1人ずつなら入れる程度には開いた。

中は真っ暗で覗いても奥の方にはなにも見えなかったが、ライナが光の球を投げ入れると、中まで蔓やコケに侵食され、赤錆びた壁や床、天井が見える。

とりあえず敵や罠の類がないか調べてから4人は1人ずつ中へ入った。

錆びた鉄の独特な臭いに少し鼻を押さえる。床を少し強く踏み締めるとビシリと音が鳴り、錆が剥がれた。

「これは、いつ崩れてもおかしくないわね……」

ライナは不安そうな顔で言った。

その時だった。周りの電灯が突然点き始め、工場の奥へと順番に明かりを灯していく。だがそのほとんどは点滅を繰り返し、一部は消えたままである。

「電力は来ていないはずなのに……」

電灯が点いたことにエリアは驚く。

「多分どこからか不正に引っ張って来たのかな。間違はなく罠だろうけど、いくしかないね」

ダルクの言葉に3人は同意し、エリアを先頭に明かりが点いている道を走っていった。

「フツ……ようやく来たか。だが、間に合うかな」

時々砂嵐でなにも見えなくなるモニターを見ながら男は言った。

「さあ、炎の小娘。お前のターンだ」

「っ……あたしのターン！」

ヒータはそう言ってデュエルディスクからカードをドローする。

その横ではアウスもデュエルディスクをつけ、目の前にいるその男と対峙している。

4人はひたすら走り続けた。幸い敵も畏もなく、分かれ道はあるが明かりは常に一方方向の道しか点いておらず、誘われていることは明白だったがそれでも進み続けた。

「あつ……シャッターが！」

ウィンが目の前にある防火シャッターが少しずつ閉まり始めているのを見て言った。

「大丈夫。充分間に合うわ」

ライナの言うとおり、閉まり始めている防火シャッターは錆びついているためか下りるのがかなり遅く、このままのペースで走っていれば半分ほどのスペースを残して余裕で走り抜けられる。

だがその瞬間、突如足場が崩れ、一番後ろを走っていたダルクを除く3人が穴に落ちていく。

「ライナ！」

ダルクはとっさに持っていた杖をその場に投げ捨て、自分の前を走っていたライナの左手を掴んだ。

「エリア！」

ウィンも風を操り、空中でエリアを掴んで向かい側に無事着地する。

「ライナ！ ダルク！」

エリアを救出して無事に着地できたあと、ウィンはダルクに支えられ宙吊りになっているライナを見て叫ぶ。

「っ……扉が閉まる！ 先にいけ！」

だがダルクはこうしている間にも閉まり続けている防火シャッターを見て言った。

「でも……！」

「私は大丈夫だから！ 早くいつて！」

ライナに言われても躊躇しているウィンだったが、

「いくわよ！」

エリアに手を引かれて走り出し、2人は滑り込むように防火シャッターをくぐった。

「くっ……なんとか間に合ったようだな。ライナ、大丈夫か？」

「ええ。引き上げられる？」

「なんとか……かな」

ダルクは全身に力を込めて引つ張り上げ、ライナを無事に救出する。

「ありがとう。ダルク。でも、この道はもう使えないわね」

息を切らしながら、穴が開いて向こう側へ渡ることができなくなった道と、閉まり切った防火シャッターを見てライナは言った。

「急ごう。別の道を探すんだ」

息を整えてダルクはそう言って立ち上がり、投げ捨てた自分の杖を拾ってライナと共に来た道に戻っていく。

「2人とも……大丈夫かな……」

閉まり切った防火シャッターの向こう側を、心配した顔で見ながらウインは言った。

「2人は強い。大丈夫よ。それよりヒータとアウスを探しましょう」
エリアはそう言ってウインの手を引っ張りながら歩き出す。だが直後になぜまだウインの手を握っているのか疑問に思い、すぐに離れた。

「エリア……あの……」

ウインがなにか言おうとしたが、
「静かに」

エリアはそれを止める。その顔は真剣そのもので、薄暗さに慣れ始めた目と耳でなにかを聞き取ろうとしているようだった。

ウインもエリアと同じように耳を澄ましてみる。すると薄暗い闇の奥で3人の声がかすかに聞こえて来た。その内の2人は聞き慣れた声である。

「ヒータとアウスだ！」

その言葉にエリアも同意し、

「こつちよ！」

と奥へと走っていく。

錆びついた鉄の扉のノブを回して部屋に入ると、そこにはヒータとアウスの後ろ姿があった。

「ヒータ！ アウス！」

2人を見つけて安堵するエリアとウインだが、ヒータとアウスの2人はデュエルディスクをつけ、鬼気迫る表情で振り向くことはなかった。

「ワシはインヴェルズ・グレズの効果発動！ 1ターンに1度、ライフを半分払うことでこのカード以外のフィールド上の全てのカードを破壊する！ “デストラクト・ワールド”！」

薄暗いせいでエリアとウインからは顔が見えない誰かがそう言う
と、ヒータとアウスのフィールドにある全てのカードは破壊された。
「そして魔法カード『^{デュアルサモン}二重召喚』を発動！　ワシはこのターン通常
召喚を2回まで行うことができる！　その効果によりワシはインヴ
エルズ・グレズをリリースし、インヴェルズ・マデイスをアドバン
ス召喚！」

カマキリのような腕と黒い甲殻を持つモンスターが2人の前に現
れる。

「インヴェルズ・マデイスの効果発動！　このカードが『インヴェ
ルズ』と名のつくモンスターをリリースしてアドバンス召喚に成功
した時、1000ポイントのライフを払うことで自分の墓地から『
インヴェルズ』と名のつくモンスター1体を特殊召喚する！　ワシ
は墓地からインヴェルズ・ホーンを特殊召喚！」

マデイスの横に4人をこの機械改造工場に誘い込んだ張本人と同
じホーンが現れる。

「インヴェルズ・マデイスで地の小娘を、インヴェルズ・ホーンで
炎の小娘をそれぞれダイレクトアタック！」

2体のインヴェルズのダイレクトアタックにより、ヒータとアウ
スのライフは2人の悲鳴と共に0になった。

「まさか、2人が負けるなんて……！」

エリアは驚きながらも、ウインと共に倒れていくヒータとアウス
に駆け寄る。

「ヒータ！　アウス！」

エリアがヒータを、ウインがアウスを抱き上げて名前を呼ぶが、
2人の体はボロボロだった。

「エリア……ウイン……逃げろ……。こいつには……勝てない……」
ヒータが薄れいく意識の中でそう言うと、2人は光の粒子となっ
て消えていった。

「ヒータ！ アウス！」

光の粒子となって消えた2人にウインは涙を流して叫び、エリアも奥歯を噛み締める。

「今一步遅かったな。いや、間に合ったとも言えるか」

2人と対峙していた男はそう言っ指を鳴らすと、部屋の明かりが一齐に点灯する。エリアとウインの暗闇に慣れた目は一瞬かすむが、すぐに慣れてその男を見る。

そこには4本の腕を持ち、体中から無数の突起物が生えた大男が立っていた。

そしてその部屋は元はメインの作業場だったのか、1階と2階を貫いた広大な部屋に、錆びついた大きな機械がまだ残っている。

「よく来たな。ワシの名はグレズ。インヴェルズを束ねる王だ」

グレズの名に2人は驚く。だが今はそれよりも聞かなければならないことがあった。

「グレズ……ヒータとアウスはどこへ消えたの！」

エリアの質問にグレズはニヤニヤと笑い、

「知りたければデュエルでワシを倒すのだな！」

と言い、グレズは下の2本の腕でデュエルフィールド型の巨大なデュエルディスクを広げて構える。

エリアは杖を置いて立ち上がり、コートの中からEURDでも使用したデュエルディスクを取り出して左腕に装着する。

「ウイン、立ちなさい。2人を助きたいのなら戦うしかないのよ！」
未だ座り込んで泣いているウインにエリアは言った。ウインは1度エリアの顔を見たあと、涙を拭いて立ち上がり、エリアと同じようにコートの中からデュエルディスクを取り出して左腕に装着する。

「いいだろう。1対2の変則デュエル。お前達2人のライフはそれ

それ4000、ワシのその倍の8000とし、一巡目のターンでは全てのプレイヤーは攻撃できない。それでいいな？」

「充分よ！ あなたを倒して2人を救う！」

エリアはそう言つてデュエルディスクにデッキをセットした。グレズもデュエルフィールドのデッキスペースにあるホルダーにデッキをセットする。

「エリア、気をつけて。わざわざ1対2なんて言う明らかに不利な条件でデュエルを仕掛けてくるなんて、相当自信があるはずだよ。ヒータとアウスの2人がかりでも勝てなかった相手だし……」

「うるさいわよ。そんなこと分かつてるわ」

ウインを見ずにエリアは言った。ウインは落ち込みながらもデュエルディスクにデッキをセットする。

「言い忘れていたが、お前達が負けたら2人の小娘と同じように肉体と魂はもらうぞ。ワシらインヴェルズの“計画”のためにな」

「なんですって……！」

「フッフ、恐れることはない。勝っても負けても炎の小娘と地の小娘には会えると言つことだ。安心して負けろ」

「うるさい！　いくわよ！」

「デュエル！」

「デュエル！」

「デュエル！」

侵攻（後書き）

みんなデュエルが大好きですw

ゴドウィン長官はすごいよね。1対3で互角以上に渡り合ったんだから。

一応DMでも遊戯&城之内vsビッグ5があっただけど、実質1対2だったしね。

まあそのあと遊星が長官と同じ1対3のデュエルで1ターン3キルをやったのけたんだがw

グレス「今日の最強カードは『インヴェルズ・グレス』。攻撃力3200、守備力0のレベル10のモンスターだ。

フフ、ワシの効果は恐ろしいぞ。ライフを半分払うことでこのカード以外のフィールド上の全てのカードを破壊することができるのだ。

ライフを半分と言うとコストがかなり高いように思えるが、逆に言えば例えどんなにライフが低くても発動できる長所でもある。

守備力が0と言うのも表示形式を変更するカードには弱いが、『悪夢再び』で墓地からサルベージできると言うことでもある。

ただ問題は一切の特殊召喚ができず、アドバンス召喚するにも3体の『インヴェルズ』をリリースしなければならん。おいそれと会える存在ではないぞ。

見事ワシを召喚すれば、フィールドの全てを喰らい尽くしてやろう！」

犠牲（前書き）

え、今自分がなにをしてるかって？
いやヘルメットと防弾シールドの準備を……。

あと、前回もそうでしたが、今回もデュエルターミナル第11弾
『オメガの裁き！』に収録されている新カードをフライング使用
していますのであしからず。

犠牲

「ワシの先攻でいかせてもらうぞ。ドロー！」

グレス

ライフ：8000

手札：6枚

フィールド：なし

エリア

ライフ：4000

手札：5枚

フィールド：なし

ウィン

ライフ：4000

手札：5枚

フィールド：なし

「ワシはインヴェルズの斥候を攻撃表示で召喚！」

下の2本の腕で掴んでいるデュエルフィールドにカードを出すと、大きなメガネのようなものをつけた小さな黒い虫が現れる。

「そしてワシは残る5枚の手札を全て伏せ、ターンエンド」

グレスが5枚の手札を全て伏せたことに、エリアもウィンも驚いた。

「5枚の……伏せカード……！」

斥候の後ろにズラリと並んだカードにエリアは目を見開く。

「フフッ、どうした。水の小娘、お前のターンだぞ」
「っ……私のターン！」

グレズ

ライフ：8000

手札：0枚

フィールド：インヴェルズの斥候（攻撃）、伏せカード5枚

エリア

ライフ：4000

手札：6枚

フィールド：なし

ウィン

ライフ：4000

手札：5枚

フィールド：なし

（攻撃力2000のインヴェルズの斥候を攻撃表示……。最初の一巡目では攻撃できないとは言え、裏側守備で出すこともできたはず。裏側守備モンスターを除外する『抹殺の使徒』を警戒してか……。それとも……）

エリアは斥候を見ながら考える。斥候の後ろではグレズがニヤニヤと笑っている。

「5枚の伏せカードも気になるけど……ここは攻める！ 私はアビス・ソルジャーを攻撃表示で召喚！」

クジラが魚人化したような体に、三叉の矛を持ったモンスターが現れる。

「アビス・ソルジャーの効果発動！ 1ターンに1度、手札の水属性モンスター1体を墓地に捨てることで、フィールド上のカード1枚を持ち主の手札に戻す！ 私は手札のフィッシュボーグ・ガンナーを捨て、インヴェルズの斥候を手札に戻す！」

「うまい！ インヴェルズの斥候は特定条件下で墓地から特殊召喚できる自己再生効果を持つけど、手札に戻ったらそれも使えない！ リリース要員がいなければ上級インヴェルズも無力になる！」

エリアの戦術にウインもガッツポーズをして喜んだ。

「フンツ、あまいわ！ 罠カード発動！ 『ロスト・ネクスト』！

このカードは自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、デッキからそのモンスターと同名モンスター1体を墓地へ送る！ ワシが選択するのは当然、インヴェルズの斥候！」

「なっ……！！」

「さらに罠カード発動！ 『ゴブリンのやりくり上手』！ 自分の墓地に存在するこのカードと同名カードの数+1枚のカードをドロ―し、その後手札からカードを1枚デッキの1番下に戻す！ まだだ、罠カード発動！ 『積み上げる幸福』！ チェーン4以降に発動でき、ワシはカードを2枚ドロ―する！」

「まさか……チェーンコンボ！」

グレズから見て左から順番に次々と発動するカードにエリアは驚く。

「まだ終わらんよ。罠カード『ゴブリンのやりくり上手』を発動！そして最後に速攻魔法『非常食』を発動！ 自分フィールド上の魔法、罠カードを任意の枚数墓地へ送って発動し、送った枚数×1000ポイントのライフを回復する！ ワシはすでに発動している『ロスト・ネクスト』、『積み上げる幸福』、『ゴブリンのやりくり上手』2枚の合計4枚を墓地へ送る！」

グレズは発動した4枚のカードをまとめて手に取り、叩きつける

ように乱暴に墓地へ送る。

「ではチェーン処理を行う。まずは『非常食』の効果でワシのライフは4000ポイント回復する！」

グレズ

ライフ：8000+4000=12000

「そして『ゴブリンのやりくり上手』の効果でカードを1枚、さらに墓地には『ゴブリンのやりくり上手』が2枚存在するためさらに2枚ドローし、1枚をデッキの1番下に戻す」

グレズはデッキからカードを3枚ドローしたあと、1枚をデッキの1番下に戻した。

「次に『積み上げる幸福』の効果で2枚をドローし、再び『ゴブリンのやりくり上手』により3枚をドロー、1枚をデッキの1番下に戻す。『ロスト・ネクスト』の効果によりデッキからインヴェルズの斥候を1体墓地へ送るが、探す必要はない。ワシがデッキに戻したカードこそ、インヴェルズの斥候なのだからな」

デッキの1番下から斥候を取り出し、グレズはそれを墓地へ送る。その後デッキは自動的にシャッフルされた。

「まあ、ルールゆえデッキはシャッフルされるがな。最後にお前のアビス・ソルジャーの効果により、フィールド上にいるインヴェルズの斥候はワシの手札に戻る」

フィールドに出ている斥候を手札に戻すと、グレズの手札は7枚となった。

「通常、自分のターンのエンドフェイズ時に手札が7枚以上ある場合、6枚になるように手札を捨てなければならない。だが相手ターン中ならば手札が7枚以上あってもルール上問題ない」

自分の手札をエリアとウインに見せつけるようにグレズは言った。

「水の小娘、感謝するぞ。お前のおかげでチェーン数が1つ稼げたわ」

エリアを指差して言ったグレズの一言に、エリアは奥歯を噛み締めながらグレズを睨む。

「そんな……ライフを回復させ、手札を補充し、墓地にインヴェルズの斥候を送りつつ、インヴェルズの斥候の特殊召喚条件を整えるなんて……！」

グレズの一切の無駄がない一連のコンボにウインは驚く。

「エリア……この人、強い……！」

「っ……！ そんなの見れば分かるわよ。私はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

結果的にグレズのコンボを後押しした上に手札を1枚消費したことに、エリアはイラついていた。

「私のターン！」

グレズ

ライフ：12000

手札：7枚

フィールド：なし

エリア

ライフ：4000

手札：3枚

フィールド：アビス・ソルジャー（攻撃）、伏せカード1枚

ウイン

ライフ：4000

手札：6枚

フィールド：なし

「……グレズのフィールド上にモンスターも伏せカードもないけど、一巡目のターンは攻撃できない……。次のターン、墓地からインヴェルズの斥候が特殊召喚され、上級インヴェルズがアドバンス召喚される……」

自分の手札とグレズのフィールドを交互に見ながらウインは呟く。そして手札のガスタ・ガルドを手に取り、

「私はモンスターを守備表示に召喚」

とガスタ・ガルドを裏側守備表示でフィールドに出した。

（ガスタ・ガルドはフィールド上から墓地へ送られた時、デッキからレベル2以下の『ガスタ』と名のつくモンスターを1体特殊召喚できる。ひとまずこれで防御を固めておこう）

裏側守備表示で出したガスタ・ガルドを見てウインはそう思った。「そして私もカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「フツ、いよいよワシのターンだな。覚悟はいいか！　ワシのターン！」

グレズ

ライフ：12000

手札：8枚

フィールド：なし

エリア

ライフ：4000

手札：3枚

フィールド：アビス・ソルジャー（攻撃）、伏せカード1枚

ウィン

ライフ：4000

手札：4枚

フィールド：裏側守備モンスター、伏せカード1枚

「墓地に存在するインヴェルズの斥候の効果発動！ 自分フィールド上に魔法、罾カードが存在しない時、メインフェイズ1の開始時にてこのカードを墓地から特殊召喚できる！ ただし、この効果を発動する場合ワシはこのターンこのカード以外の特殊召喚はできず、インヴェルズの斥候はシンクロ素材にも『インヴェルズ』と名のつくモンスターのアドバンス召喚以外のリリースにも使えない」

グレズはそう言つて墓地から斥候を攻撃表示で特殊召喚した。

「そしてワシはインヴェルズの斥候をリリースし、インヴェルズ・モースをアドバンス召喚！」

斥候が光の球になると、その光の球から巨大な羽を持つモンスターが現れる。

「インヴェルズ・モースの効果発動！ このカードが『インヴェルズ』と名のつくモンスターをリリースしてアドバンス召喚に成功した時、ライフを1000支払うことで相手フィールド上に存在するカードを2枚まで持ち主の手札に戻す！」

グレズ

ライフ：12000 - 1000 = 11000

「ワシは水の小娘のフィールド上のアビス・ソルジャーと伏せカードを手札に戻す！」

「今だ……！ 罾カード発動！ 『奈落の落とし穴』！ 相手が攻

撃力1500以上のモンスターを召喚、反転召喚、特殊召喚した時に発動！ その攻撃力1500以上のモンスターを破壊し、ゲームから除外する！」

エリアは対象となった『奈落の落とし穴』を発動し、モースを破壊しようとする。

しかし、グレズはいたって冷静だった。

「フンッ、あまいと言っているだろう！ 手札から速攻魔法発動！

『侵略の一手』！ アドバンス召喚に成功した自分フィールド上に表側表示で存在する『インヴェルズ』と名のつくモンスター1体を手札に戻して発動し、デッキからカードを1枚ドロースる！ ワシはインヴェルズ・モースを手札に戻す！」

グレズは先程召喚したモースをフィールドから手札に戻した。

「さらに速攻魔法『サモンチェーン』を発動！ チェーン3以降に発動でき、ワシはこのターン、3回の通常召喚を行うことができる！」

「3回の通常召喚！ インヴェルズ・モースを召喚したのに、まだ2回も召喚できるようになるなんて……！」

「その通り。しかもワシの手札にはアビス・ソルジャーの効果で手札に戻ったインヴェルズの斥候と、『侵略の一手』で戻ったインヴェルズ・モースもいる。それにこれはあくまで通常召喚なので、インヴェルズの斥候の制約にもかからない」

ニヤニヤと笑いながらグレズは言った。

「さて、せっかくここまで積まれたチェーンを無駄にするのも忍びない。手札から速攻魔法『連鎖爆撃』チェーン・ストライクを発動！ このカードの発動時に積まれているチェーンの数×400ポイントのダメージを相手に与える！ 積まれているチェーン数は5つなので、小娘のどちらかに2000ポイントのダメージを与える！」

「2000ポイントものダメージ……ですって……！」

膨れ上がったダメージ量にエリアは驚愕する。

「安心しろ、水の小娘。ワシを畏にかけようとしたお前は、ワシのモンスターチェーン・ストライクの攻撃で葬ってやる。『連鎖爆撃』のダメージを受けるのは風の小娘、お前だ！」

グレスがウインを指差しと、『連鎖爆撃』から伸びた5つの鎖がウインに襲いかかり、爆発を起こしてウインのライフを悲鳴と共に削る。

ウイン

ライフ：4000 - 2000 = 2000

「い、痛い……！ ど、どうして実際に痛みが……！」
全身に走った痛みにウインは悶え、膝を着く。

「もう1つ言い忘れていたな。このデュエルでは実際に痛みを伴う。炎の小娘と地の小娘の体がボロボロだっただろう。お前達はライフが0になる以前に、最後まで立っていられるかな？」

邪悪な笑みを浮かべてグレスは言った。

「チェーン処理の続きだ。ワシは『サモンチェーン』の効果で残り2回の通常召喚の権利を得、さらに『侵略の一手』の効果によりカードを1枚ドロ。水の小娘が発動した『奈落の落とし穴』は不発となったが、ワシのインヴェルズ・モースの効果は無効化されていないため、残るアビス・ソルジャーを手札に戻す」

グレスに言われ、エリアは仕方なくアビス・ソルジャーを手札に戻した。

エリアがアビス・ソルジャーを手札に戻した頃、ウインが痛みを耐えながらゆっくりと立ち上がる。だがまだ体はよろけている。

「ようやく立ち上がったか。次はお前の番だぞ。ワシは2回目の召喚権を使用し、インヴェルズの斥候を召喚。そして3回目の召喚権

でインヴェルズの斥候をリリースし、再びインヴェルズ・モースをアドバンス召喚！」

斥候が召喚されすぐに光の球になり、先程と同じように光の球からモースが現れた。

「インヴェルズ・モースの効果発動！『インヴェルズ』と名のつくモンスターをリリースしてアドバンス召喚に成功した時、ライフを1000支払うことで相手フィールド上のカードを2枚まで手札に戻す！ワシは風の小娘のフィールドにある守備モンスターと伏せカードを手札に戻す！」

グレス

ライフ：11000 - 1000 = 1000

トランプ

「うっ……罫カード発動！『和睦の使者』！このターン、私のモンスターは戦闘によっては破壊されず、私は戦闘ダメージを受けない！」

「フン。だがそのモンスターは手札に戻ってもらっぞ」

ウインはふらつく手で『和睦の使者』を発動し、ふらつく手で守備モンスターを手札に戻した。

「『和睦の使者』は発動プレイヤーにのみ効果が適用される。このターンで風の小娘を倒すことはできんが、インヴェルズ・モースの攻撃対象はもう1人残っている」

そう言っグレスはエリアを見る。身構えるエリアに、グレスは笑った。

「インヴェルズ・モースで水の小娘にダイレクトアタック！」

モースはその羽を広げてエリアに襲いかかり、強靱な腕でエリアを殴る。エリアはデュエルディスクで防ぐが、全身に走る痛み悲鳴を上げる。

エリア

ライフ：4000 - 2400 = 1600

エリアは倒れかけるが、ギリギリで足を踏ん張って耐えた。しかし息は荒い。

「フフフ……どうだ、恐ろしいか。まだ始まったばかりだぞ？　ワシはカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「くっ……私のターン！」

グレズ

ライフ：10000

手札：2枚

フィールド：インヴェルズ・モース（攻撃）、伏せカード2枚

エリア

ライフ：1600

手札：5枚

フィールド：なし

ウィン

ライフ：2000

手札：5枚

フィールド：なし

ダルクとライナはライナが作り出した光の球を頼りに、真っ暗な

工場を走り続けた。そして錆びた鉄の扉の開くと、急に広く明るい部屋に出てとつさに^{まぶた}瞼を閉じる。

少しずつ^{まぶた}瞼を開くと、手すりの先から聞き覚えのある声が聞こえた。ダルクとライナは急いで手すりに近づいて下を見ると、エリアとウィンがデュエルディスクをつけて立っている。

「エリア！ ウィン！」

2人の名前を叫ぶと、

「ダルク！ ライナ！」

エリアとウィンも2人に気づいて上を見上げる。

「ほう、新しいお友達か。だがこのデュエルを止めることはできません」

グレスも気づいてエリアとウィンの上にいる2人を見上げた。

「グレス……！ インヴェルズの王自らが……？」

意外な人物にダルクは驚いた。

「エリア、ウィン。どうしてグレスとデュエルなんて……」

「それが、ヒータとアウスがグレスとのデュエルに負けて、どこかに消えたの。助けたければこのデュエルに勝つしかないって……」

ライナの質問にウィンは涙ながらに答える。

「なんだって。クソッ……！」

「おっと！ そこから動かすなにもするな！ 怪しい動きをすれば人質に取っている2人の命はないぞ！」

近くにある階段から下に下りようとしたダルクをグレスは制止する。ダルクとライナは仕方なく、上からデュエルの動向を見守ることにした。

「さて、少しデュエルが中断したな。水の小娘、お前のターンの続きだ」

グレスに言われ、エリアは自分の手札を見る。

（もう1度アビス・ソルジャーを召喚してインヴェルズ・モースを

手札に戻してダイレクトアタックできても、根本的な打開にはならない……。それにヘタに戻すとまた効果を使われる可能性もある）手札にあるアビス・ソルジャーを見ながらエリアは考える。

「ならここは……このカードは手札の水属性モンスター1体を捨てることで、手札から特殊召喚できる。私は手札のアビス・ソルジャーを捨て、鬼ガエルを攻撃表示で特殊召喚！」

黄色と赤の極彩色のカエルが現れ、1度頬を膨らませて鳴く。

「鬼ガエルの効果発動！ このカードが召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、デッキまたはフィールド上から水属性、水族、レベル2以下の全ての条件が揃ったモンスター1体を墓地へ送ることができる！ 私はデッキから水属性、水族、レベル1の黄泉ガエルを墓地へ送る！」

デッキから選ばれた黄泉ガエルをグレズに見せ、エリアはそれを墓地へ送った。

「そして私は鬼ガエルをリリースして、フロストザウルスをアドバンス召喚！」

鬼ガエルが光の球となると、その中から全身が氷でできた、竜脚りゅうきょくやくかもく下目のような長い首を持つ恐竜が現れる。

「フロストザウルスでインヴェルズ・モースを攻撃！」

フロストザウルスはゆっくりと重い足取りでモースに近づくと、その首を鞭のようにしならせてモースを破壊した。

グレズ

ライフ：10000 - 200 = 9800

「フン……この程度では痛くもかゆくもないな」

グレズの体にも痛みは走ったが、言葉どおりまったく動じること

なく立っていた。

「でもダメージは与えられた。やったね、エリア。でも、どうして鬼ガエルがいる時に墓地のフィッシュボーグ・ガンナーを特殊召喚しなかったの？ フロストザウルスをチューニングしたらグングニールを呼べたのに……」

「フィッシュボーグ・ガンナーの特殊召喚にもグングニールの効果を使うにも、手札を捨てなければならぬのよ。グリーズ相手にこれ以上手札を消費するわけにはいかない。分かるでしょ。ターンエンドよ」

「ご、ごめん……私のターン！」

グリーズ

ライフ：9800

手札：2枚

フィールド：伏せカード2枚

エリア

ライフ：1600

手札：2枚

フィールド：フロストザウルス（攻撃）

ウィン

ライフ：2000

手札：6枚

フィールド：なし

「グリーズのフィールドにモンスターはいない。一気に攻め込むチャンスよ。ウィン」

2階からライナは言った。

（ガスタ・ガルドの攻撃力はわずか500……ライフが9800もあるグレズを倒すには少なすぎる。なら……）

ウインはガスタ・ガルドではなく別のカードを手に取り、

「私はニュートを攻撃表示で召喚！」

と体のあちこちがそれぞれ分離して宙に浮いているモンスターを召喚する。

「ニュートでグレズにダイレクトアタック！ “グラビトン・パンチ”！」

ニュートは右手を握り締め、ロケットパンチのように拳を飛ばす。
「そんな単調な攻撃を通すと思うな！ 罠カード発動！ 『ガード・ブロック』！ ダメージ計算時に発動でき、その戦闘によって受ける戦闘ダメージを0にし、ワシはカードを1枚ドロウする！」

グレズの前に現れたバリアーに阻まれ、ニュートの攻撃はグレズに届かなかった。攻撃を防いだあと、グレズはデッキからカードを1枚ドロウする。

「ダメだ。2人の攻撃は完全にグレズに読まれている。アビス・ソルジャーでのバウンスはないと分かっていたからこそ、あえて発動タイミングが限定されている『ガード・ブロック』を伏せていたんだ」

グレズの戦術にダルクは驚嘆した。

「っ……私はカードを4枚伏せ、ターンエンド」

「おっと、ではワシはお前のエンドフェイスに罠カード^{トラップ}を発動させよう」

「なっ……このタイミングで！」

「ワシが発動させるのはこれだ！ 『侵略の波紋』！ ライフを500ポイント支払い、自分の墓地に存在するレベル4以下の『インヴェルズ』と名のつくモンスター1体を選択し、自分フィールド上

に特殊召喚する！」

グリーズ

ライフ：9800 - 500 = 9300

「ワシは墓地よりレベル1のインヴェルズの斥候を攻撃表示で特殊召喚！」

グリーズのフィールドに波紋が描かれ、その中から斥候が笑いながら飛び出て来た。

「そんな……まだ墓地にはもう1体インヴェルズの斥候がいる……。魔法、罠カードトラップも使い切ったから、次のターン、その1体も特殊召喚される。私のターンで『侵略の波紋』を発動したから、インヴェルズの斥候の制約にもかからない……！」

「そう言うことだ。そしてお前はすでにエンド宣言をしている。いくぞ、ワシのターン！」

グリーズ

ライフ：9300

手札：4枚

フィールド：インヴェルズの斥候（攻撃）

エリア

ライフ：1600

手札：2枚

フィールド：フロストザウルス（攻撃）

ウィン

ライフ：2000

手札：1枚

フィールド：ニュート（攻撃）、伏せカード4枚

「この瞬間墓地にいるインヴェルズの斥候の効果発動！ 自分フィールド上に魔法、罨カードトラップが存在しない時、メインフェイズ1の開始時にこのカードを墓地より特殊召喚できる！」

墓地にいる斥候が特殊召喚され、グレズのフィールドに2体の斥候が並ぶ。

「そしてインヴェルズの斥候2体をリリースし、インヴェルズ・ガザスをアドバンス召喚！」

2体の斥候は踊りながら光の球となり、2つの光の球が合わさって、その中から漆黒の甲殻と3本の角を持つ、まさに魔物と呼べるモンスターが現れる。

「インヴェルズ・ガザスの効果発動！ このカードが『インヴェルズ』と名のつく2体のモンスターをリリースしてアドバンス召喚に成功した時、2つの効果から1つを選択して発動する！ 1つは、フィールド上の魔法、罨カードトラップを全て破壊する！ もう1つは、フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する！」

「なっ……魔法、罨カードトラップかモンスターを一掃する効果ですって……！」

ガザスの恐るべき効果にエリアは驚愕する。

「さて、風の小娘のフィールド上には伏せカードが4枚あるが、ワシはな、プレイヤーを直接攻撃するのが趣味なのでな。ワシはモンスター破壊を選択！ “種の断絶”シード・セバー！」

グレズが言うとガザスは叫び声を上げ、波紋状に広がった叫びはエリアのフロストザウルスとウインのニュートを苦しめながら破壊した。

「さて、水の小娘よ。宣言通り、ワシのモンスターの攻撃で葬つてやるう。インヴェルズ・ガズスで水の小娘にダイレクトアタック！
“デストラクション・ショック”！」

ガズスは両手の間に黒いエネルギーを作り出し、それをエリアに放つ。

「エリアにフィールド上にカードはない！」

「エリアー！」

ダルクとライナが叫ぶ。エリアももはや打つ手はなく、迫りくる黒いエネルギーに絶望する。

「私の友達は倒させない！ 罠カード発動！ 『地縛霊の誘い』！」

相手モンスターの攻撃宣言時に発動でき、その攻撃モンスターの攻撃対象は私が選択できる！ 私は、エリアへの攻撃を私自身に変更する！」

「なんだと！」

「ウイン！」

思いもよらないウインの行動にその場にいた全員が驚いた。

ガズの攻撃は軌道を変え、ウインに直撃する。ウインの悲鳴が部屋中に響き渡る。

ウイン

ライフ：2000 - 2800 = 0

「私……は……罠カードを……発動……！ 『強欲な贈り物』……！
！ 相手は……カードを2枚……ドロウする……。私は……この……
……効果を……エリアに対して……使う……！」

最後の力を振り絞ってウインはデュエルディスクを操作する。そしてエリアを見ながら、

「エリア……勝って……ね……」

と言って、力なく仰向けに倒れていく。

「ウィン！」

倒れいくウィンにエリアは駆け寄り、ウィンを抱き寄せて膝を着く。

「ウィン！ どうして！ どうしてこんな……！」

腕の中で倒れているウィンに、エリアは大粒の涙を流しながら言った。

「エリア……この……カード……を……」

ウィンは自分のデュエルディスクに伏せていた2枚のカードを抜き取り、震える手でエリアに渡す。

「ウィン……！ このカードは……！」

渡されたカードを見てエリアは驚いた。

「エリア……ごめんね……。友達……なのに……エリアの気持ちに……気づいて……あげられなくて……」

涙を流しながら、息も絶え絶えにウィンは言った。

「違う！ 謝るのは私の方！ 本当は気づいていた！ ウィンは悪くないって！ 最初から分かっていたはずなのに、誰かを憎むことで自分を正当化していた！ だからウィンは、今でも私の……！」

ウィンの顔にエリアの涙が落ちる。ウィンはその言葉を聞いて、安心したかのように笑顔になった。

そして、エリアに託した2枚のカードを残して、ウィンは光の粒子となって消えた。

犠牲（後書き）

ウィンファンの皆様ごめんなさい！　で、でもこうしないと……！
前作のキャラ説明でウインは『なによりも友達を思う優しい子』
って書いてあったでしょ？

でも大丈夫！　遊戯王の世界では友情や絆を重んじる者が最後に
勝つんです！　……多分（え

それにしても、斥候は働きすぎだよね！

グレズのフィールドに毎ターン一番最初に召喚されるのは斥候で
す。

こういう1対2の変則デュエルでは手札を消費しないでモンスター
を絶やさないと戦術はすごい貴重。ゴドウィン長官がそれを教えて
くれました。

まさかここまでキレイに繋がるとは自分でもビックリだけど……。

グレズ「今日の最強カードは『インヴェルズ・ガザス』。攻撃力2
800、守備力0のレベル8のモンスターだ。

フフ、インヴェルズの斥候だと思ったか？　残念だが下っ端が出
るほどインヴェルズ軍の層は薄くはない。

前回のワシほどではないが、このカードもフィールド上はかなり
のカードを破壊することができる。状況に応じて2つの効果を使い
分けるのが基本だ。

インヴェルズの宿命として、『インヴェルズ』と名のつくモンス
ターをリリースしなければ効果は使えんぞ。しかもこのカードは2
体の『インヴェルズ』をリリースしなければ効果を使えん。

まあ、インヴェルズ万能態なら1体のリリースで効果が使えるの
で、『侵略の波紋』で万能態を呼び出しアドバンス召喚するのが最
もよい方法だろう。

ワシと違って特殊召喚もできる。その場合効果は使えんが、2800の攻撃力があれば大抵のモンスターを倒すことができるぞ」

友愛（前書き）

これにて前作EURDから続く霊使い達のデュエルは終わりです。
後書きで今作のボツネタや裏話もあるのでそちらもお楽しみ下さい。

友愛

「フフフ……ハハハハハ！ 多少予定とは違ったが、3人目の小娘は捕らえた。見るがいい！」

そう言つてグレズは両手を広げて上に掲げると、その後ろに突然4つの柱が現れる。

それぞれの柱には『風』、『水』、『炎』、『地』の文字があり、その内『炎』と『地』にはヒータとアウスが両手を上に鎖で繋がれていた。

「ヒータ！ アウス！」

2人を見つけてダルクは叫ぶ。だが2人は気を失っているのか、ダルクの声に反応することはなかった。

「そしてここにもう1人追加される」

グレズがそう言つと、光の粒子となつたウインが『風』と書かれた柱に現れ、2人と同じように鎖に繋がれる。

「グレズ……！ いったい3人をどうするつもりだ！」

「フフフ……これは生贄だ」

「なに？」

グレズの言葉にダルクは驚く。

「これこそワシらインヴェルズの最終兵器、『エレメンタルバースト』！ 『風』、『水』、『炎』、『地』の猛々しき4つの魂を生贄に発動されるこの兵器により、憎きヴァイロンどもを討ち滅ぼすのだ！」

そう言つてグレズは笑う。その顔は邪悪そのものだった。

「猛々しき4つの魂……？ まさか、お前がEURDの会場に来ていたのは……！」

「ほう、察しがいいな。その通り。その猛々しき4つの魂を選別す

るためだったのだよ、黒の小娘」

「なっ……僕は女じゃ——じゃなくて！ 今すぐ3人を解放しろ！」
ダルクの言葉にグレズは短く笑い、

「ならばワシを倒してみるのだな！ 水の小娘に全てを託して！
できればだな！」

と言ってもう1度高笑いを上げる。

「倒すわよ……」

グレズのその笑い声を、エリアの静かな一言が止めた。ゆっくり
と立ち上がり、グレズを睨む。

「私は、あなたを倒す！」

エリアの言葉に、グレズは唇の端を持ち上げ、

「やってみるがいい！」

と再びデュエルの姿勢を取る。

「まあ、一方的なワンサイドゲームもつまらん。特別に風の小娘が
残したその2枚の伏せカードをお前のフィールド上に伏せることを
許可しよう。さあ、風の小娘が最後に発動した『強欲な贈り物』の
効果でカードを2枚ドロしろ！」

グレズに言われ、エリアはウィンが残した2枚のカードを見る。

「ウィン……あなたが残したこの2枚のカードで、必ずグレズを倒
す。私に……力を貸して」

エリアはそう言っでウィンの2枚のカードを自分のデュエルデ
ィスクに差し込み、カードを2枚ドロした。

「さて、ワシのターンの続きからだ。インヴェルズ・ガザスの攻撃
は終了したが、まだワシはエンド宣言をしていない。カードを1枚
伏せ、ターンエンド！」

「私のターン！」

グレス

ライフ：9300

手札：2枚

フィールド：インヴェルズ・ガザス（攻撃）、伏せカード1枚

エリア

ライフ：1600

手札：5枚

フィールド：伏せカード2枚

「私はチューナーモンスター、深海のディーヴァを攻撃表示で召喚！」

下半身が魚の美しい女性が現れ、オペラのような美声を奏でる。

「深海のディーヴァの効果発動！ このカードの召喚に成功した時、デッキからレベル3以下の海竜族モンスター1体を特殊召喚できる！ 私はデッキからレベル3のニードル・ギルマンを攻撃表示で特殊召喚！」

深海のディーヴァが歌うと、三叉の矛を持つ魚人が現れた。

「そして墓地にいるフィッシュボーグ・ガンナーの効果発動！ 自分フィールド上にレベル3以下の水属性モンスターが表側表示でいる時、手札を1枚捨てることで墓地からこのカードを特殊召喚できる！ 私は手札の『強欲なウツボ』を捨て、フィッシュボーグ・ガンナーを攻撃表示で特殊召喚！」

魚が入った水槽を胴体としている珍妙な機械が現れる。

「レベル3のニードル・ギルマンに、レベル2の深海のディーヴァをチューニング！」

深海のディーヴァとニードル・ギルマンが上空に飛び上がり、歌

いながら2つの光の輪となった深海のディーヴァがニードル・ギルマンを包む。

「深き海に眠りし神たる者よ。地上に現れ海の怒りを思い知らせよ！ シンクロ召喚！ 出でよ、神海竜ギシルノドン！」

全身が水でできた長い首と翼を持つ龍が現れ、全身の水を震えらせて叫び声を上げる。

「そしてレベル5の神海竜ギシルノドンに、レベル1のフィッシュボーグ・ガンナーをチューニング！」

現れた神海竜ギシルノドンはフィッシュボーグ・ガンナーと共にすぐに上空に飛び上がり、1つの光の輪となったフィッシュボーグ・ガンナーに包まれる。

「氷りつきし湖に封印されし古の龍よ。今こそその封印を解き、世界に革命をもたらせ！ シンクロ召喚！ 覚醒せよ、氷結界の龍ブリューナク！」

神海竜ギシルノドンの水の体が見るみる氷つていき、全身が氷りついた。そしてその氷りついた体を砕き、その中から氷でできた体と翼を持つ龍が現れ咆哮する。

「ブリューナクの効果発動！ 手札を任意の枚数墓地に捨てることで、その枚数分だけフィールド上のカードを持ち主の手札に戻す！ 私は手札を1枚捨て、インヴェルズ・ガザスを手札に戻す！」

「見事な連続シンクロと言った所だが……お前に戻されるまでもない！ 速攻魔法発動！ 『侵略の一手』！ 自分フィールド上表側表示で存在するアドバンス召喚に成功した『インヴェルズ』と名のつくモンスター1体を手札に戻し発動し、デッキからカードを1枚ドロウする！ ワシはインヴェルズ・ガザスを手札に戻す！」

グリーズはブリューナクの対象となったガザスを、ブリューナクの効果よりも先に手札に戻し、カードを1枚ドロウした。

「……ならブリューナクでグリーズにダイレクトアタック！ “ブリザード・ペタル”！」

ブリューナクは口から花びらのような氷の結晶を吐き出し、グレズを攻撃する。

グレズ

ライフ：9300 - 2300 = 7000

「フツ……先程よりは効いたが、その程度ではワシに膝を着かすこともできんぞ！」

グレズの言うとおり、ブリューナクの攻撃でもグレズはビクともしなかった。

「くっ……私はカードを2枚伏せ、ターンエンド！」
「ワシのターンだ！」

グレズ

ライフ：7000

手札：5枚

フィールド：なし

エリア

ライフ：1600

手札：0枚

フィールド：氷結界の龍 ブリューナク（攻撃）、伏せカード4枚

「この瞬間、再び墓地にいるインヴェルズの斥候の効果発動！ 自分フィールド上に魔法、罫カードトラップが存在しない時、メインフェイズ1の開始時にて墓地からこのカードを特殊召喚できる！ ただし、

この効果を発動する場合ワシはこのターン他の特殊召喚はできないため、墓地から特殊召喚できるのは1体だけだな」

そう言ってグレズは墓地から斥候を1体特殊召喚する。

「インヴェルズの斥候をリリースし、インヴェルズ・ギラファをアドバンス召喚！」

斥候が光の球となり、その中から右手が砲身になっている大男が現れる。

「インヴェルズ・ギラファのレベルは7だが、このカードは『インヴェルズ』と名のつくモンスター1体をリリースすることで、攻撃表示でアドバンス召喚できる。そしてインヴェルズ・ギラファの効果発動！ 『インヴェルズ』と名のつくモンスターをリリースしてアドバンス召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカードを1枚選択し、そのカードを墓地へ送ることでワシはライフを1000ポイント回復する！ ワシはブリューナクを選択！」

「くっ……^{トラップ}罠カード発動！ 『生贄の祭壇』！ 自分フィールド上のモンスター1体を墓地へ送って発動し、私はそのモンスターの元々の攻撃力分のライフを回復する！ 私はブリューナクを墓地へ送る！」

「フン、お前も墓地へ送られる前に自ら墓地へ送るか。だがそれが命取りだ！ 手札から速攻魔法『^{チェーン・ストライク}連鎖爆撃』を発動！ このカードの発動時に積まれているチェーンの数×400ポイントのダメージを相手に与える！ 積まれているチェーン数は3つ！ よってお前に1200ポイントのダメージを与える！」

「なっ……！」

グレズが発動した『^{チェーン・ストライク}連鎖爆撃』から放たれた3つの鎖がエリアを襲い、爆発と共にエリアのライフを削る。

エリア

ライフ：1600 - 1200 = 400

「フッフ、あと1つチェーンが積まれていれば勝負は決まっていたな。惜しいものだ」

「っ……私は……『生贄の祭壇』の効果により……ブリーナクの元々の攻撃力……2300ポイント分……ライフを回復する……！」

エリア

ライフ：400 + 2300 = 2700

ライフが回復すると、エリアの体の痛みは少しだけ和らいだ気がした。

「無駄な足掻きだ。インヴェルズ・ギラファで水の小娘にダイレクトアタック！ “デストロイ・キャノン”！」

ギラファが右手の砲身をエリアに向けると、砲身にエネルギーが集まり出す。

「発射ア！」

グレズの合図と共に、エネルギー弾がエリアに放たれる。

（っ……！ ダメ、今この伏せカードを——ウィンが残してくれたカードを使うわけにはいかない……！）

迫りくるエネルギー弾にエリアは伏せカードの発動をやめ、両手を顔の前に構えて防御の姿勢を取る。そこに、ギラファのエネルギー弾は直撃した。

エリア

ライフ：2700 - 2600 = 100

ギラファの攻撃を受け、エリアは絶叫のような悲鳴を上げる。力なく膝を着き、うつ伏せに倒れた。

「ハハハ！ 最高だ！ 最高に盛り上がるシチュエーションではないか！ お前のライフは残り100！ フィールド上にモンスターはなく、手札は0！ あるのはいつ発動するかも分からん伏せカードが3枚だけ！ その状況でどうやってワシに勝つのか見物だな！」
グレズは皮肉たっぷりに言って笑い出す。

「ワシは最後にカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

グレズがエンド宣言をしても、エリアはカードをドローする所か起き上がることさえできなかった。

「エリア！ 立ってくれ！ 頼む！」

「エリア……！ あなたまでいなくなったら、私……！」

ライナはその場に泣き崩れ、両手で顔を覆う。ダルクの目にも涙が溜まっている。

「フン。痛みで立つこともできんか。まあ、そのままサレンダーするのが賢明だな。そうすればその痛みからもすぐに解放される。それとも、すでに気を失っているのか？」

グレズがそう言うと、エリアはゆっくりと体を起こし始める。ライナも涙もそのままに立ち上がり、再びエリアを見守る。

「こん……なの……」

「ん？」

エリアのか細い声に、グレズは興味がなさそうに耳を傾ける。

「こんなの……全然痛くない……。こんなの……ウインが受けた……痛み……比べたら……！」

それは誰が見ても明らかに強がりだった。だがエリアにとって、今まで自分がウインに言ってきた言葉の棘の方がはるかに痛いものだと思っていた。

「ほう……インヴェルズ・モースの攻撃を受け、『連鎖爆撃』のダメージも受け、さらにはインヴェルズ・ギラファの攻撃を受けてもなお立ち上がるか。その気概だけは認めてやろう」

ふらつきながらも立ち上がったエリアにグレズは言った。その髪は乱れ、息も絶え絶えである。

「だが立ち上がった所でなにができる！ もはやお前の敗北は決した！ おとなしくサレンダーしろ！」

グレズはエリアを指差して言った。

「私は……負けない……！」

エリアの右手がゆつくりと、だが確実にデッキに伸びる。

「私の、仲間のために……！」

それは、ダルクとヒータのことだった。

「私の、友達のために……！」

それは、ライナとアウスのことだった。

「そしてなによりも、私の、1番の親友のために！」

それは、ウインのことだった。

「私は、絶対に負けない！」

エリアの右手がデッキに届く。

「私の——ターン！」

グレズ

ライフ：7000

手札：2枚

フィールド：インヴェルズ・ギラファ（攻撃）、伏せカード1枚

エリア

ライフ：1000

手札：1枚

フィールド：伏せカード3枚

「私はレクンガを攻撃表示で召喚！」

目玉がついた緑の球体から無数の触手が伸びたモンスターが現れる。

「レクンガの効果発動！ 自分の墓地に存在する水属性モンスター2体をゲームから除外することで、自分フィールド上に水属性、植物族、レベル2、攻撃力、守備力共に700のレクンガトークン1体を攻撃表示で特殊召喚する！ 私はこの効果を3回使い、墓地のアビス・ソルジャー、黄泉ガエル、鬼ガエル、フロストザウルス、ニードル・ギルマン、神海竜ギシルノドンの6体をゲームから除外し、レクンガトークン3体を特殊召喚！」

オリジナルのレクンガが除外された6体のモンスターを吸収し、自らの触手を左右に伸ばして自分よりも二回り小さく色も薄いレクンガトークンを3体生み出す。

「今更そんなザコモンスターを並べた所でなにができる！ ワシのフィールド上には攻撃力2600のインヴェルズ・ギラファがいる！ 対してお前のフィールド上で最も攻撃力が高いのはレクンガの攻撃力1700！ 例え全てのモンスターの攻撃力を合わせた所で、ワシを倒すことはできん！」

「それがどうしたの！ レクンガでインヴェルズ・ギラファを攻撃！」

「なんだと！」

エリアに言われ、レクンガは迷うことなくギラファに向かっていく。

「血迷ったか！ 自ら死にくるとは……いいだろう！ 地獄への道行きを手伝ってやる！ 構えろ！ インヴェルズ・ギラファ！」

GRESに言われ、ギラファは自分に向かってくるレクンガに照準を合わせる。

「地獄にいくのはあなた1人よ！ ウィンが残した速攻魔法発動！
『収縮』！ フィールド上表側表示で存在するモンスター1体の
元々の攻撃力は、エンドフェイズ時まで半分になる！」

「なに！ バカな……なぜ風の小娘はそのカードを使わなかった！
ウィンがエリアに託した『収縮』を見てグレズは驚愕する。

「ウィンは私の勝利を信じて、このカードを託した……。使ってい
ればたしかにライフは残るけど、切り札にもなりうるこのカードを
私に託すことで、ヒータとアウスを助けるために自分の身を犠牲に
した……。！ だから私は、絶対に負けるわけにはいかない！ 『収
縮』の効果により、インヴェルズ・ギラファの元々の攻撃力を半分
にする！」

ギラファの体が見るみる小さくなり、レクンガよりも小さくなっ
た。そしてレクンガの触手の一撃にあっさりと破壊される。

グレズ

ライフ：7000 - 400 = 6600

「お……おのれ……！」

予想外のダメージにグレズは怒りを露にする。

「続けてレクンガトークン3体でグレズにダイレクトアタック！」

3体のレクンガトークンは一斉にグレズに襲いかかり、それぞれ
1回ずつグレズを攻撃する。

グレズ

ライフ：6600 - 700 - 700 - 700 = 4500

「だからなんだと言うのだ！ そんなザコモンスターの攻撃を何度重ねた所で、ワシを倒すには程遠いわ！ 次のワシのターン、手札にある攻撃力1850のインヴェルズの先鋭でお前のフィールド上にいる攻撃表示のモンスターに攻撃すれば、ワシの勝ちだ！」

グレスは自分を攻撃して来たレクンガトークンを弾き飛ばし、エリアを指差して言った。

「なに勘違いしているの……まだ私のバトルフェイズは終了してないわ！」

「なに？」

トラップ

えいぞくトラップ

「罠カード発動！ 永続罠『リビングデッドの呼び声』！ 自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する！」

エリアは直前のターンに自分で伏せていたカードを発動した。

「『リビングデッドの呼び声』か……なるほど。墓地からブリユーナクを蘇生させ、ワシに追撃をかけるつもりだな。だがあまい！」

トラップ

えいぞくトラップ

罠カード発動！ 永続罠『超古代生物の墓場』！ このカードが表側表示で存在する限り、特殊召喚されたレベル6以上のモンスターは攻撃できず、効果を発動することもできない！」

「ダメだ！ 『超古代生物の墓場』は特殊召喚されたレベル6以上のモンスターのほとんどの行動を封じる！ レベル6のブリユーナクじゃあ攻撃するどころか効果を発動することもできない！」

「しかも、グレスのデッキはアドバンス召喚がメインだから、自分は影響をほとんど受けない……！」

グレスが発動したカードにダルクモライナも絶望する。だがエリアの目は光を失っていないかった。

「なにを言っているの……私が特殊召喚するのはブリユーナクじゃないわ！」

「なんだと？ ではいったいなにを……いやそもそも、お前の墓地のモンスターはレクンガの効果を発動させるために、ほとんどのモ

ンスターをゲームから除外しているはず。ブリューナク以外にまともなモンスターはいなかったはずだ！」

「私はブリューナクの効果を発動する時のコストとして、手札からモンスターを墓地に捨てたのよ」

エリアに言われ、グレスはハツとする。

「あの時……だがそのモンスターがレベル5以下でなければ結果は同じだ！」

「安心なさい。私が特殊召喚するのはレベル4よ！」

「レベル4のモンスターだと！ いったいなにを……！」

「教えてあげるわ。私が特殊召喚するのはこのモンスターよ！ 蘇れ、トリプル・ヴァイパー！」

エリアは墓地から3つのそれぞれ別の頭を持つ大蛇を特殊召喚した。

「攻撃力1800……フン、なにが出てくるかと思えば。所詮ただの悪足掻きではないか！」

「トリプル・ヴァイパーは、1度のバトルフェイズ中に3回攻撃することができる！」

「なにい！」

「ただし、トリプル・ヴァイパーは自分フィールド上の水族モンスター1体をリリースしなければ、攻撃宣言できない」

トリプル・ヴァイパーの効果に驚いたグレスだったが、直後に安心したかのように笑い出す。

「なにを言っている。お前のフィールド上にいるレクンガもレクンガトークンも植物族！ 例え3回攻撃できる効果があろうとも、宝の持ち腐れではないか！」

レクンガとレクンガトークンを指差して言って、グレスは再び高らかと笑う。

エリアは笑っているグレズを無視し、ソリットビジョンとして出ているウインが残した最後の伏せカードを見て、

「グレズ……この伏せカードがなにか分かる……？」

と静かな怒りを湛^{たた}えて言った。

グレズは唇の端を持ち上げたままエリアの伏せカードを見る。だがその顔から少しずつ余裕が消えていき、徐々に蒼白していく。

「ま……まさか……そのカードは……！」

グレズはたった1枚だけ、この状況から自分のライフが0になる可能性を秘めたカードを思い出した。

「見せてあげるわ。これが私とウインの、最強のコンボよ！ ウインが残した罠^{トラップ}カードを発動！ 永続罠^{えいぞくトラップ}『DNA改造手術』！ このカードは、発動時に種族を1つ宣言することで、フィールド上表側表示で存在する全てのモンスターの種族を、このカードが表側表示で存在する限り、宣言した種族に変える！ 私が宣言するのは、水族^{スイゾク}！」

エリアが水族と宣言すると、エリアのフィールドにいるトリプル・ヴァイパー、レクunga、そして3体のレクungaトークンの体は流体の水に変わる。

「これでトリプル・ヴァイパーの攻撃宣言コストは揃った！ 覚悟しなさい、グレズ……！」

「3回の攻撃宣言コスト……！ お前は、そこまで計算して3体のレクungaトークンを……！」

怒りに燃えるエリアの顔に、グレズは生まれて初めての恐怖を覚える。

「1回や2回なんて遠慮はいらないわ。あなたには私達全員の怒りを、3回分、その身に受けてもらう！ さあ、いくわよ！ まず1回目！ 水族に変わったレクungaトークン1体をリリースし、トリプル・ヴァイパー第1の攻撃！ “ファースト・ファンゲ”！」

右手を握り締めてエリアが言くと、トリプル・ヴァイパーの左の

頭は隣にいるレクンガトークンを丸呑みにし、そのあとグレスにその毒牙を立てる。

グレス

ライフ：4500 - 1800 = 2700

「ぬううつ……！」

トリプル・ヴァイパーの攻撃にグレスの体は初めて仰け反る。まったく予想だになかった展開に、肉体はダメージ以上の衝撃を受けていた。

「2回目！ レクンガトークンをリリースし、トリプル・ヴァイパー第2の攻撃！ “セカンド・フング”！」

トリプル・ヴァイパーの右の頭はレクンガトークンを丸呑みにし、グレスを襲う。

グレス

ライフ：2700 - 1800 = 900

立て続けに攻撃を受け、ついにグレスの体勢が崩れる。その体はふらつき、息も荒い。

だが、エリアは攻撃の手を緩める気は毛頭なかった。

「トドメよ……！ グレス、覚悟はいいかしら……！ 3回目！ レクンガトークンをリリースし、トリプル・ヴァイパー第3の攻撃！ “サード・フング”！」

トリプルヴァイパーの真ん中の頭がレクンガトークンを丸呑みにすると、トリプル・ヴァイパーの3つの頭は同時にグレスに向かっ

ていく。

「バカな！ 1ターンで…… たった1ターンで7回の攻撃を仕掛けるだと……！ ありえない……！」

だが、そのありえない7回目の攻撃が、今まさにグレズに迫っていた。

グレズ

ライフ：900 - 1800 = 0

「ぬおおおおおおお！」

グレズはライフが0になると、部屋を揺らすほどの衝撃で膝を着き、

「バカな…… そんな…… バカな……」

と呟きながら重い音を響かせてうつ伏せに倒れた。

グレズが倒れると、3人を縛っていた鎖と柱は消え、重力に従って3人は下に落ちる。

「や…… やった…… エリアが、勝った！」

ダルクとライナは涙ながら近くにある階段で下に下り、ダルクはエリアのもとへ、ライナは3人のもとへ走っていく。

隣を通る際ライナはチラリとグレズを見たが、完全に気を失っている様子だった。

「エリア！ 大丈夫か？」

立っているのがやっとだったエリアはグレズを倒すと緊張が解けたのか、片膝を着く。ダルクもエリアと視線を合わせるため膝を折る。

「私は…… 大丈夫。それより3人は……」

心配した顔でエリアは3人のもとへいったライナを見る。

「大丈夫。気を失ってるだけ」

3人が息をしているのを確認し、ライナは安堵した顔で言った。

「よかった……！ 本当に……よかった……」

ライナの言葉を聞いて、エリアは心から安堵する。そして3人のもとへいこうと立ち上がった。

「エリア、無理するな」

ダルクが肩を貸そうとするが、エリアはそれを断る。

「自分の足で、会いにいきたいの」

そう言ってゆっくりと、だがしっかりと足取りで歩き、途中に倒れているグレスに一瞥もくれず3人に近づく。

眠るように目を閉じているウインのもとへくると、膝を着いて抱き寄せる。

「ウイン……ありがとう……」

そう言って涙を流すと、ウインの顔はどこか笑っているように見えた。

「さあ、早くここを出よう。僕がヒータを背負うよ」

「じゃあ私がアウスね」

ダルクとライナはそう言って2人を背負い、2人分の杖を横にして背負っている相手の太ももを下から支える形にする。ダルクは背中に当たるヒータの胸の感触に少し戸惑うが、気にしないようにした。

「エリア、大丈夫か？」

ダルクに心配されるが、エリアは笑顔でうなずきウインを同じように背負う。

「こっちよ。私達が来た道から戻りましょう」

ライナが作り出した光の球を頼りに、3人はダルクとライナが来た道に戻ろうと階段を上る。

「あり……えない……」

3人が階段を上った頃、グレスはゆっくりと起き上がり始める。

「ワシが……小娘なんぞに……負けるなど……ありえないいいいいい！」

そう言つてグレスは立ち上がる。その叫び声は工場全体を揺らし、老朽化がかなり進んだ壁や天井の一部にヒビが入り始める。

そしてついに、崩れ始めた。

「まずい！ 急ごう！」

グレスの叫び声で崩れ始めた工場は、一部が崩れると連鎖的に次々と崩れ出す。3人はその中を急いで走る。

現実を直視できていないグレスはその場で叫び声を上げ続ける。

自分の上にある天井が自分に向かって落ちて来ても、その声を止めることはなかった。

3人は落ちてくる壁や天井に気をつけながら、一瞬たりとも足を止めることなく走り続ける。

「出口だ！」

そして入って来た扉が見えて来た。開けたままの扉から入ってくる光に安堵する。

だが、その光は左右から崩れた壁と天井に遮られ、扉が塞がれる。

「そんな……！」

3人はさすがに立ち止まって崩れた先にある出口を見た。もはや光は見えない。

後ろを振り向くと天井も壁も次々と崩れ、このままでは生き埋めになる。

その時だった。崩れて塞がった扉の先から強烈な光が放たれ、その衝撃で扉を塞いでいた瓦礫が粉々に砕けて飛び散る。

その光と礫^{いざし}に驚いて振り向くと、そこには金の輪を持つ不思議な姿の天使がいた。

「オメガ！」

その天使にダルクは驚いた。オメガも3人の存在に驚いた様子だったが、

「早く！」

と手を伸ばす。3人は命からがら工場からの脱出に成功した。

3人が工場から出たとほぼ同時に、工場は轟音と土煙を上げて完全に崩れ去った。

「た……助かりました……」

背負っている3人をひとまずその場に下ろし、ダルクは肩で息をしながら言った。

「なぜ君達のような子供がこのような場所に……」

3人の息が落ち着くのを待ってオメガは聞いた。

「オメガも、なぜここに……。街を襲っていたインヴェルズは？」
ダルクは逆に聞き返す。

「私は街を襲っていたインヴェルズを撃退するために出陣して来た。しかし理由は不明だが、突如インヴェルズが撤退を開始したのだ。追撃しようとしていたが、この建物からグレズの叫び声が聞こえ、急遽調べようとした所に君達がいたと言うわけだ」

オメガはそう言っで、次に自分がした質問に答えるよう求める。

3人は今は崩れた工場の中で起こったことを全て話した。

「そうだったのか……。グレズめ、そのような計画を立てていたとは……」

3人の話にもメガは正直に驚く。

「となると、インヴェルズが撤退した理由はそれだろう。元々私達

の注意を街に向けさせるために襲っていたとしたら、計画が失敗した時点で撤退してもおかしくない。あれほど大規模な侵攻はリスクも大きいからな」

オメガはそう言っで、改めて3人の顔を見て、

「しかし、感謝するぞ。君達のおかげでインヴェルズの計画を打ち破ることができた」

と褒め称える。

「なにか望むものがあれば、精一杯の謝礼を出すが……」

オメガのその言葉に、3人は顔を見合わせ、

「いりません。それに……本当に大切なものは、望むものは、取り返せたから……」

とエリアは未だ眠っているウインを見ながら言った。

「そうか……。では、君達の友情に、永遠の祝福を」

そう言っで、オメガは光の粒を雪のように降らせながら空へと帰っていった。

「う……ん……」

オメガが空へと帰ったあと、ウイン達3人は目を覚ます。

「ウイン！ みんな……よかった……」

3人が目を覚ましたことに、エリア達は本当に、心の底から安堵した。

「エリア……勝ったんだね」

自分の前で涙を流しながら喜ぶエリアにウインは言った。

エリアはなにも言わずウインを抱きしめる。ウインも笑顔でエリアの背中に腕を回す。

「ごめんね……ウイン……」

涙を流しながら、絞り出した声でエリアは言った。その姿に、ヒータとアウスも2人の関係が戻ったことを察する。

「さあ、帰ろう！」

ダルクの言葉に全員がうなずき、立ち上がった。

——半年後。

「さあ第2回EURDがいよいよ始まりました！ 出場メンバーは前回と同じ霊使い達！ 司会もわたしグレファアが務めます！ あのあと頭を100万回は下げてようやく許してもらえました！」

「別に許したわけではありません。失言、失態をすれば今度は即座に退場してもらうのでそのつもりで」

最初からハイテンションなグレファアにフリードは冷静に言い放つ。

「そ、それではファースト・ホイーラーの2人がスタートラインに着いたようです！ もう少しで始まるでしょう！」

フリードに言われ、グレファアは少し冷や汗を掻きながら言った。

「ウイン。今度こそ決着をつけるわよ」

「うん」

アウトコースに立つファースト・ホイーラーのエリアが笑顔で言う、ウインも笑顔を向けて頷く。

そして2人がデュエルディスクにフィールド魔法『スピード・ワールド2』をセットすると、カウンターが動き始める。

会場には様々な人達がいた。

ダルクのファンクラブのアーシー。

同じくファンクラブのノースウェムコ。

2人に連れられ会場に来ているフォーチュンレディ達。

インヴェルズの侵攻から立ち直り始めている魔法都市エンディミオンの人々。

そして、今度は本当にデュエルを楽しむために見に来ているオメ

ガ達ヴァイロン。

カウンターが0になると同時に、エリアとウィンは言った。
「ライディング・デュエル！ アクセラレーション！」

友愛（後書き）

——燃え尽きたぜ……真っ白にな……。

って正直そんなこと言ってる場合でもないけど、これにて霊使い達のデュエルは終わりです。

もう本当にネタがありません。なにか続くような終わり方ですが、ありません。フリとかではなく、本当にありません。

デュエル小説は大変だと言ったことが身をもって知りました。オリカもガチカードもなしで燃えるようなデュエル展開を考えるのって難しい。

さて前書きで言ってたボツネタですが、実はラストターンの前にこんなシーンを入れる予定があつたのです。文字数を削減するため台本書きですが←

エリア「私は、絶対に負けない！」

ダルク「なんだ……？ 僕達のカードから、光が……！」

グレス「なにが起きている……？ 捕らえた小娘達のカードからも

……！」

ダルク「まさか……僕達のカードが、エリアに、奇跡を起こす力を

……！」

エリア「私の——ターン！」

こんな感じのシーン。でもボツりました。

なぜかって？ 書いてて恥ずかしいから！（笑

こう言うのってアニメとか映像で見ると分にはすごく盛り上がるけど、実際に書いたり読んだりすると恥ずかしいんだよねw

それに別に霊使い達はシグナーとかでもないの、こんな力が働くのもなあと言うのも。

なにより、そんな意味 不明な力なんか働かなくても、友情と絆の力はいつでも奇跡を起こせるってことだよ！

他にもどうでもいい裏話として、エリアの『覚悟』の言葉を打ち間違えて『介護』とやったりとか…… しかも二回もw

『介護しなさい、グリーズ』とか『グリーズ、介護はいいかしら』とか、もはや本当に意味 不明w

他にもボツネタとか裏話がありますが、それはまたあとで活動報告にでも。

エリア「今日の最強カードは『トリプル・ヴァイパー』。攻撃力1800、守備力400のレベル4のモンスターよ。

まあまず普通のデュエルでお目にかかることはないわね。だけどこのカードを使いこなすことができれば、1ターンキルも可能よ。

1度のバトルフェイズで3回のダイレクトアタックができれば、合計で5400のダメージを与えることができるからね。その時3体のリリースモンスターも攻撃できていれば、初期ライフ8000を削り切ることも可能のはずよ。

リリースするモンスターも『DNA改造手術』で水族に変えれば、基本的にどんなモンスターでもコストにできるし。

変わった使い方として、『DNA改造手術』で水族に変えたおジヤマトークンを『洗脳解除』で奪い返してコストにするって言うのもいいわよ。

同じ方法でナイトメア・デーモン・トークンなら攻撃要員にもなるし、1ターンキルもしやすくなるわ。別に1ターンキルを推奨しているわけじゃないけど」

では、最後に知りたい人がいるかどうか知らないけど、グリーズのキャラ設定←

グレス

インヴェルズを束ねる偉大なる王。

知略と武力に長け、今回の『エレメンタルバースト計画』を考えついた。

デュエルの腕前も超一流で、ヒータとアウスのタッグを破り、エリアとウインのタッグもウインを倒し、エリアのライフを残り100まで追い詰めるなど、間違いなく作中で最強クラスの实力者。

ちなみに、廃工場に潰されたくらいじゃ死なない甲殻なので、まだ生きてます。

使用するデッキはもちろんインヴェルズで、チェーン系カードを組み合わせた連鎖侵略デッキ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1570p/>

遊戯王～友愛～

2011年1月15日20時40分発行